近代英語辞書の発達（下）

三　輪　伸　春

目次

はじめに

第１章　OE 期のラテン語辞書

第２章　初期近代英語辞書発達史

第３章　外国語と辞書

第４章　ルネッサンスと英語辞書発達史

第５章　初期の英語辞書：難解語辞書

（１）Robert Cawdrey, *A Table Alphabeticall* (1604)

（２）John Bullokar, *An English Expositor* (1616)

（３）Henry Cockeram, *The English Dictionarie, or An Interpretor of Hard English Words* (1623)

（４）Thomas Blount, *Glossographia* (1656)

（５）Edward Phillips, *The New World of English Words* (1658)

（６）Elisha Coles, *An English Dictionary* (1676)

（７）John Kersey, *A New English Dictionary* (1702)

（８）Nathan Bailey, *An Universal Etymological English Dictionary* (1721)

（９）Nathan Bailey, *Dictionarium Britannicum or a more COMPLEAT UNIVERSAL ENGLISH DICTIONARY* (1730)

（10）T. Dyche & W. Pardon, *A New General English Dictionary* (1735)

（以上，前号：以下，本号）

(11) Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755) 130
(12) Charles Richardson, *A New Dictionary of the English Language* (1836–37) 137
(13) Thomas Sheridan, *A General Dictionary of the English Language* (1780) 140
(14) John Walker, *A Critical Pronouncing Dictionary* (1791) 142

第6章　近代英語辞書に掲載されたギリシア借用語 144
1．序
2．コードリの辞書に掲載されたギリシア借用語の特質
表1，表2，表3
参考文献 153

(11) Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755)

近代英語辞書は，難解語をより多く収録して説明する，イングランドの地名，人名といった固有名詞を説明する，語源を明記する，という目的で編纂された。また，その対象を，教育を受けられない婦女子，身分が低く教育を受けられないが，商売など職業上の目的で教養を身に付けたいと希望する人々，イギリス人と取り引きをするために英語を習得したい外国人においていた。更には，辞書が徐々に発展し内容が高度になってくると，専門的な学問を目指す人々，特殊な職業につきたいと思う人には，その分野の初歩的な知識を与える，といった意図で編纂された近代英語辞書はベイリーで，質量ともに頂点に達する。ところで、15世紀末のキャクストンによる印刷術導入により沢山の外国語の書物が翻訳・出版された。また，ルネッサンスの意識も高まり，古典が英語に翻訳・出版された。そうした古典の翻訳作業の過程で，外国語との比較から，必然的に生じた，英語は劣等言語であるという意識はこの頃になると薄れてきていた。劣等言語である英語をなんとか洗練し，貧弱な語彙をなんとか豊富にしようと

する，学者や文人達の懸命の努力がともかくも実ってきたのである。その証拠に，ドライデン（1631-1700），デフォー（1660-1731），スウィフト（1667-1745），アディソン（1672-1719），スティール（1672-1729），ポープ(1688-1744）といった作家が，優れた散文，劇作品，随筆を次々と産み出したのである。つまり，英語は，もはや外国語の力を借りなくても，優れた文学作品を産み出すほどに洗練され，語彙も豊富になったのである。（マレー，p.36）

しかし，歴史の経験が教えるところによると，一度頂点に立つと，後は没落する道しか残されていない。例えば，エジプト，インド等の四大文明，アレキサンダー大王，ローマ帝国。文化，文明を見ても同じである。プラトンの時代に頂点を極めた後に衰退の一途を辿ったギリシア文明とギリシア語，キケロの時代に最盛期を迎えた後は衰退したローマ文明とラテン語。このような歴史的事実を既に熟知していたイギリス人達の間には，アン女王（在位1702-14）の時代を頂点に，通例イギリスのオーガスタン時代（Augustan Age）と称されている文学最盛期にあたる18世紀の英語を，その勢力，活力を衰えさせることなく維持しなければならないという意識が盛り上がってきた。

エリザベス朝時代の自由奔放な個人主義，独立志向の精神は，18世紀に入ると影を潜め，逆に，強力な秩序感覚と規制の尊重がこの時代に顕著な一般的特徴である。この風潮が英語に対する態度にも明確に現れ，英語に手を加えて，望ましい方向に向かわせようとする運動が展開された。具体的には，1）英語を法則化して正しい慣用の基準を確立すること，2）英語の欠点を排除して，改良を加え，洗練すること，3）英語を理想の形にして永久に固定化すること，の３点である。

時あたかも，大陸でも国語擁護のための運動が盛んとなり，フランスではアカデミ・フランセーズ（l' Académie française，1635年創立），イタリアではアカデミア・デラ・クルスカ（Accademia della Crusca，1582年創立）が創設され，それぞれ規範となる辞書を出版し，国語擁護の活動を始めていた。

以上のような時代背景の下に，ベイリーで頂点に達した近代英語辞書を叩き台として，改めて模範となり規範となりうる英語辞書を編纂し，完成させるこ

とが時代の要請するところとなった。その具体的な成果が，有名なサミュエル・ジョンソンの英語辞書である。

イタリアではクルスカ・アカデミーが1582年に創設され，1612年にはイタリア語の規範を示す辞典（*Vocabolario degli Accademici della Crusca*）が出版された。1635年に創設されたフランスのアカデミー・フランセーズは1694年に辞典を出版した（*Dictionnaire de l'Académie française*）。イギリスでも17世紀の一定しない綴り字法や確たる規範のない語法，あるいは，難解な外国語の濫用に対する批判・反省のもとに，標準的な，規範となる英語・英文法の確立を望む声が上がってきた。

1617年，国王ジェームズ1世の時に「王立協会」設立の計画が立てられたが，国王の死去で実現せず，1635年にはチャールズ１世のもとに学士院設立の運動があったが実現しなかった。やっと，1660年に「王立学士院（Royal Society）」が設立された。学士院の本来の主旨は，自然科学に関する知識の促進にあったが，英語の在り方にも大きな関心を持っていた。王立学士院の影響下にあって，ドライデン（1693），スウィフト（1712），ウォーバートン（1747）等多数の文人や学者が，英語を改良し，洗練すべきであると主張した。具体的には，英語の語彙を精選し，語法を確定し，文体を優雅にし，規範となる英語を示す，信頼できる辞典を編纂・出版するという要請である。この要請に応えるべく選ばれたのがサミュエル・ジョンソンである。

ジョンソンは1747年に「辞書編纂計画案（THE PLAN OF A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE）」を発表していた。また，悲劇 *Irene*（1737），風刺詩 *London*（1738）を出版し，イタリア語，フランス語からの翻訳もあり，更には，古典に関する深い造詣が評価されて，新しい辞書の編纂はジョンソンの手に委ねられることになった。

OED の最初の編集者である J.A.H. マレーは，ジョンソンの辞書の特色を次のように要約している。まず第１に，各単語の用例を引用例文で示したこと，第２に，語義の細部にわたる識別と区分である。引用例文は，ジョンソンが記憶していたままに書きとめる，あるいはジョンソンの書斎の中にある本にジョ

ンソンが印を付けて，それを編集助手の６人が書き移すという作業によりなされた。もし，ジョンソンの辞書の中に引用されている引用例文をすべて，いちいち原典に当たり確認をしていたら，到底８年半という時間の枠，たった６人の助手だけではなされえなかっただろうと，他ならぬ，*OED* の編者であるマレーは言っている。

神ならぬジョンソンの記憶しているままに書いてゆくわけであるから，当然のことながらある程度の誤りはある。例えば，dispatch という単語は，16世紀前半にイタリア語から借用されて以来，ジョンソンの時代までには既に，dispatch という綴り字が確立されていた。ところが，ジョンソンの辞書の見出しの形は，語源欄のフランス語 depescher の影響のためか，despatch となっている。なお，ジョンソンの辞書では，語源はフランス語 depescher となっているが，*OED* は，語源はフランス語ではなく，イタリア語の dispacciare であるとして，

> ad. It. dispacciare 'to dispatch, to hasten, to speed, to rid away, any worke' (Florio), ...
>
> (*OED*, despatch, q. v.)

とあるが，フロリオの『イタリア語—英語辞典（J.Florio, *A Wolde of Wordes*, 1598)』の初版には，この単語は見出せない。

dispatch という語形がジョンソン以前に既に確立されていたのにもかかわらず，ジョンソンが despatch という語形を見出し語として立てた結果，dispatch という形は1820年を最後として英語から姿を消す一方，despactch の方が正しい形として一般に使われるようになってしまった。これもジョンソンの影響の大きさを証明する事件である。

また，ジョンソンは，distilment の引用文を *Hamlet* から採用している。

Disti'lment. *n. s.* [from *distil.*] That which is drawn by distillation.

A word formerly used, but now obsolete.

Upon my secure hour thy uncle stole,
And in the porches of mine ears did pour
The leperous *distilment.* *Shakespeare's Hamlet.*

ところが，1773年版の instillment の項でも，上の引用文中の distilment を instillment に替えて引用しているのは，ジョンソンがよく似たふたつの単語を混同したために生じた間違いである。但し，初版には，instillment という見出し語そのものがない。

ジョンソンの辞書と言えば，oat，pension，patron，excise 等に見られるその個性的な定義の仕方で有名である。ここでは，lich を引用する。

LICH. *n. s.* [lice, Saxon.] A dead carcase; whence *lichwake,* the time or act of watching by the dead; *lichgate,* the gate through which the dead are carried to the grave; *Lichfield,* the field of the dead, a city in Staffordshire, so named from the martyred christians. *Salve magna parens. Lichwake* is still retained in Scotland in the same sense.

スタッフォードシャ州リッチフィールドはジョンソンの生まれ故郷である。

マレーの言うように，ジョンソンの辞書の最大の特徴は，緻密な定義と豊富で的確な引用例にあるので，その実例を示す。引用例は，ジョンソンが「自分が純粋な英語の泉，純正な英語の表現法の純粋な源泉と認めた，王政復古以前の作家群から（from the writers before the restoration, whose works I regard as *the wells of English undefiled,* as the pure sources of genuine diction)」(Preface，頁付けはないが7頁目）なされている。即ち，フィリップ・シドニー（1554-86）から王政復古の時代までに活躍した，フッカー（c.1554-1600），ベーコン（1561-1626），ローリー（1552-1618），シェイクスピア，スペンサー（1552-99），ミルトン（1608-74）等である。

A'GONY. *n. s.* [α γ ω ν , Gr. *agon*, low Lat. *agonie,* Fr.]

1. The pangs of death; properly the last contest between life and death.

Never was there more pity in saving any than in ending me, because therein my *agony* shall end. *Sidney, b.* ii.

Thou who for me did feel such pain,
Whose precious blood the cross did stain,
Let not those *agonies* be vain. *Roscommon.*

2. Any violent or excessive pain of body or mind.

Betwixt them both, they have me done to dy,
Through wounds and strokes, and stubborn handeling,
That death were better than such *agony,*
As grief and fury unto me did bring. *Fairy Queen, b.* ii.

Thee I have miss'd, and thought it long, depriv'd
Thy presence, *agony* of love! till now
Not felt, nor shall be twice. *Milton's Paradise Lost, b.* ix.

3. It is particularly used in devotions for our Redeemer's conflict in the garden.

To propose our desires, which cannot take such effect as we specify, shall, notwithstanding, otherwise procure us his heavenly grace, even as this very prayer of Christ obtained angels to be sent him as comforters in his *agony.* *Hooker, b.* v.

語彙の豊富さをうたい文句にしたベイリーと，語彙の正確な定義と豊富な引用文例を特徴とするジョンソンとを比較してみる。

Bailey, (**1730**)

PA'RABLE [π α ρ α β o λ η , Gr.] a continued Similitude or

Johnson (**1755**)

PARA'BLE. *adj.* [*parabilis*, Lat.] Easily procured. Not in use.

Comparison; a Declaration or Exposition of a Thing by Way of Similitude or Comparison; a dark Saying, an Allegory; a Fable, or allegorical Instruction founded on something real or apparent in Nature or History; from which, some Moral is drawn, by comparing it with some other Thing in which Persons are more immediately concerned.

PA'RABLE. *n. s.* [π α ρ α β ο λ η; *parabole*, Fr.] A similitude; a relation under which something else is figured.

【聖書から２例，ドライデンから１例】

PA'RADISE [of π α ρ ά δ ε ι σ ο s of π α ρ ά and δ ε ν ω, to water Gr(...)] a Place of Pleasure. The Garden of *Eden*, where *Adam* and *Eve* resided during their Innocency; also the Mansion of Saints and Angels that enjoy the Sight of God, the Place of Bliss in Heaven; according to the Notion of the *Greeks*, it is an Inclosure, or Park stored with a ll Sorts of Plants and wild Beasts of Pleasure; and with us, any delightful Place is called a Paradise.

Bird of **PARADISE,** a rare Bird so called, either on Account of its fine Colours, etc. or else because it is not known where it is bred, from whence it comes, or

PA'RADISE. *n. s.* [π α ρ ά δ ε ι σ ο s; paradise, Fr.]

1. The blisful regions, in which the first pair was placed.

【ミルトンから１例】

2. Any place of felicity.

【シェイクスピアから４例，ミルトンから１例】

whither it goes.

PA'TRIARCH [π α τ ρ ι ά ρ χ η s of π α τ η ρ a Father, and α ρ χ o s, Gr. Chief,] the first Father of a Family or Nation.

PA'TRIARCH [in an *Ecclesiastical* Sense] a Dignity in the Church superiour to an Archbishop, of which in antient Times there were 5, *viz.* at *Rome, Constantinople, Alexandria, Ierusalem,* and *Antioch.*

PA'RIARCH. *n. s.* [*patriarche*, Fr. patriarcha, Latin.]

1. One who governs by paternal right; the father and ruler of a family.

【ミルトン，ドライデンより各１例】

2. A bishop superior to archbishops.

【ローリー，アイリフより各１例】

この比較からも分かるように，ベイリーが定義を詳細にしているのに対し，ジョンソンは，定義を簡潔にした上で，引用例で実際の用法を示している。

(12) Charles Richardson, *A New Dictionary of the English Language* (1836-37)

コードリから徐々に発展してきた近代英語辞書は，ベイリーで飛躍的な段階を迎え，ジョンソンによって近代辞書としてあるべき要件がほぼ完全に満たされた。そこで，ジョンソン以降 *OED* までは，ジョンソンの辞書になかった要素の補完を意図した辞書が出版された。その第１は，リチャードソンに見られるように，引用例をＭＥまで遡らせた辞書であり，第２は，発音を重視したシェリダン，ウォーカーの辞書である。

ジョンソンが，規範とするにふさわしい英語の上限をフィリップ・シドニーとしたのに対し，引用例を14世紀の作家まで遡らせて歴史主義に基づく辞書編纂に貢献したのはリチャードソンの，***A New Dictionary of the English Language,*** Combining expalanation with Etymology: (...) The Quotations are arranged Chronologically from the earliest period to the beginning of the present

century (1836-37) である。リチャードソンは，自分の言語観はホーン・トゥークから大きな影響を受けていることを自ら明言しながら，単語の語義記述には，もっとも古い意味を最初に挙げるべきである，として次のように述べている。

> The great first principle upon which I have proceeded, in the department of the Dictionary (...), is (...) that a word has one meaning, and one only; that from it all usages must spring and be derived;
>
> (Richardson, *A New Dictionary of the English Language,* PREFACE, SECTION Ⅱ)

単語の意味を，もっとも古い語源から順次，歴史的発展の跡をたどって記述するべきであるという。この点，ジョンソンも彼の「英語辞書の計画」で，「日常生活によく用いられる単語について，複数の意味を挙げると共に，最初に，もっとも古い意味を記述すべきである」と次のよう述べている。

> In explaining the general and popular langugage, it seems necessary to sort the several senses of each word, and to exhibit first its natural and primitive signification, (...)
>
> (Johnson, *THE PLAN OF A DICTIOANRY OF THE ENGLISH LANGUAGE,* p. 22)

しかし，リチャードソンは，ジョンソンがこの主張を彼の辞書で実践していないとして，ジョンソンの辞書の arrive の項を例に挙げて批判しいる。まず，ジョンソンの辞書の arrive の項。

> To **ARRIVE**. *v. n.* [*arriver*, Fr. to come on shore.]
>
> 1. To come to any place by water.
>
> ドライデンから１例

2. To reach any place by travelling.

　1例

3. To reach any point.

　ジョン・ロックから1例

4. To gain any thing.

　テイラー，アディソンから各1例

5. The thing at which we *arrive* is always suppose to be good.

6. To happen; with *to* before the person. **This** sense seems not proper.

　ウォラーから1例。

(Johnson, *A Dictionary of the English Language,* q. v. arrive)

この記述に対して，第1に，ジョンソンは本来語には語源を挙げ，外来語には派生語を挙げると「計画」では述べているのに，フランス語 arriver の派生語が挙げてない。第2に，「計画」では，まず原初の意味を挙げ，次いでそれから必然的に生じる意味を挙げる，としているが，ジョンソンの定義の1から2へは必然的な意味の展開とはいえない等，リチャードソンの批判は4項目にわたる（PREFACE, SECTION I）。ちなみに，リチャードソンの arrive の項は以下のようになっている。

ARRI'VE,　Fr. *Arriver;* It. *Arrivare;* Sp. *Arribar;* Mid. Lat. *Adripare;* that is,
ARRI'VAL,　Ad *ripam* appelere, to come to a bank, or shore, venire *alla riva.*
ARRI'VANCE.　The Low Lat. has also *Ad-littare, ad-littus,* appellere. Our old authors write *rive, arrive.*

To come to shore, to sail to; generally to come to, to reach, to attain.

Aboute Southamptō he *a ryuede* ich vnderstande.　R.Gloucester, p. 62.

（以下，チョーサー，ガワー，ミルトン，ドライデン等総計15例）

(Richardson, *A New Dict. of the Eng. Lang.,* arrive)

語源，ME の異綴り字への言及はあるが，語義はジョンソンの精緻な分類に比べるといささか大雑把であり，意味変化の展開を筋道立てて説明すべきであるという主張のわりには簡単すぎる。リチャードソンの語源解説は，歴史比較言語学が発展する以前の思弁文法の域を出ていないうえに，英語の語源としては，14世紀が上限では不十分であるが，辞書編纂に歴史主義をより意識的なものにし，*OED* への道を開いた点は評価すべきである。

ボズウエルの『ジョンソン伝（J.Boswell, *Life of Johnson*）』，1772年３月27日の記述によると，ボズウエルの「発音を確認するための辞書があると便利でしょうね。」という発言に対し，ジョンソンは「言語は記号によるよりも耳から習得する方が格段に易しく習得できる。」と答えた。また，ボズウエルが「シェリダンが辞書に発音欄を設けている。」というと，ジョンソンは「辞書を肌身離さず持ち歩くことは出来ないから，いざ発音を知りたいときには役に立たない。大体アイルランド人であるシェリダンに発音を決定するどんな資格があるのか。上院議員の中で最善の雄弁家であるチェスターフィールド卿は，great は state と脚韻を踏むべきだと僕に語ったのに反し，下院での最善の雄弁家であるウィリアム・ヤング卿は，僕に，great は seat と脚韻を踏むべきであるといい，great を grate と発音するのアイルランド人だけだ。」といった。という主旨の意見を述べている。当時，大母音推移の大体の趨勢は固まっていたとはいえ，まだまだイングランド全体に標準的な母音の発音は確定していなかったという意味では，ジョンソンの判断は適切であったといえよう。ジョンソンの辞書には，アクセントは付けてあるが発音の指示はなかったので，発音を重点的に扱った重要な辞書が２種類出版された。シェリダンとウォーカーである。シェリダンの辞書が発音を看板にしていることはそのタイトル頁に明らかである。

（13）Thomas Sheridan, *A General Dictionary of the English Language,*

One main Object of which, is, to establish a plain and permanent STANDARD of PRONUNCIATION. TO WHICH IS PREFIXED A RHETORICAL GRAMMAR. BY THOMAS SHERIDAN, A. M, (1780).

タイトルページのアイルランドの篤志家への献辞（DEDICATED TO THE VOLUNTEERS OF IRELAND）に加えて，すぐ次の頁にはかなり煽情的なアイルランドの民族意識高揚を意図した文章がある（TO THE LORDS AND GENTLEMEN OF THE VOLUNTEER ASSOCIATIONS OF IRELAND）。次いで，約1,700人に及ぶ予約購読者の一覧表（SUBSCRIBERS NAMES），序文（PREFACE），そして主に発音法を述べた文法（A RHETORICAL GRAMMAR OF THE ENGLISH LANGUAGE）が56頁続く。アイルランド人であるシェリダンの編集した辞書に厳しい批判が集中したのは，発音の記述がアイルランド方言風という内容もさることながら，タイトルページのアイルランド人への献辞，巻頭の愛国心に満ちた文章が反発を買ったのかもしれない。そこで，シェリダンは1789年に改訂第２版を出版した。版型が13×21.5cm から22×27cm と倍になり，２段組から３段組になったが，語彙数はそれほど増えていない。巻頭にはシェリダンの肖像画が付けられ，タイトルも，

A COMPLETE DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE, Both with regard to SOUND and MEANING. One main Object of which is, to establish a plain and permanent STANDARD of PRONUNCIATION. TO WHICH IS PREFIXED A PROSODIAL GRAMMAR.

（1789年版）

に変えた。そして，前付きも，PREFACE，それに母音・子音の発音法，音節の解説，調音法等を主に扱った，A PROSODIAL GRAMMAR OF THE ENGLISH LANGUAGE という構成になった。もっとも目立った変更は，アイルランド人への献辞と民族意識高揚を意図した煽情的な文章が完全に削除されたことである。

発音解説の例。

WIND, wi^{2}´nd or wi^{1}nd´. s. A stronger motion of the air; direction of the balst from

a particular point; breath, power or act of respiration; breath modulated by an instrument; air impregnated with scent; flatulence, windness; any thing insignificant or light as wind; Down the Wind, to decay; To take or have the Wind, to have the upper hand.

（Sheridan, WIND，初版も再版も同じ記述）

母音の上の数字は，巻頭に発音記号案内がある。

Scheme of the Vowels.

	First.	Second.	Third.
a	$\overset{1}{\text{hat}}$	$\overset{2}{\text{hate}}$	$\overset{3}{\text{hall}}$.
e	$\overset{1}{\text{bet}}$	$\overset{2}{\text{bear}}$	$\overset{3}{\text{beer}}$.
i	$\overset{1}{\text{fit}}$	$\overset{2}{\text{fight}}$	$\overset{3}{\text{field}}$.
o	$\overset{1}{\text{not}}$	$\overset{2}{\text{note}}$	$\overset{3}{\text{noose}}$.
u	$\overset{1}{\text{but}}$	$\overset{2}{\text{bush}}$	$\overset{3}{\text{blue}}$.
y	love-$\overset{1}{\text{ly}}$	$\overset{2}{\text{lye}}$.	

（初版，p. xiv，再版，p. ix）

見出し語の母音の発音法を知るにはこの一覧表を見ればよい。wind の場合，$\overset{2}{\text{wi}}$nd or $\overset{1}{\text{wi}}$nd とあるから，[waind] もしくは [wind] である。

(14) John Walker, *A Critical Pronouncing Dictionary* (1791)

シェリダンが見出し語にアクセント符号を付け，母音の発音を記号で示したのに対し，ウォーカーは，各単語の発音について極めて詳細な説明を付けた。例えば，drama には，語義の説明が４行，22字しかないのに，発音の説明は77行，約770字を占める。drama の全行数が86行（１頁２段組）であるから，この頁の半分は drama の発音のために費やされている。シェリダンと同じく wind

を取り上げて比較してみる。

WIND, wind[2] or wind[1], s. A strong motion of the air; direction of the balst from a particular point; breath, power or act of respiration; breath modulated by an instrument; air impregnated with scent; flatulence, windness; any thing insignificant or light as Wind--Down the Wind, to decay--To take or have the Wind, to have the upper hand.

☞ These two modes of pronunciation have been long contending for superiority, till at last the former seems to have gained a complete victory, except in the territories of rhyme. Here the poets claim a privilege, and readers seem willing to grant it them, by pronouncing this word, when it ends a verse, so as to rhyme with the word it is coupled with:

"For as in bodies, thus in souls we find,

"What wants in blood and sporits, fill'd with *wind*."

（以下，66行にわたる解説はほとんど，１頁２段組の右側１段全部を占める）

（Walker, *A Critical Pronouncing Dictionary,* 1853年版）

まず気づくことは，語義がシェリダンと全く同じであることである。シェリダンの字句のうち stronger が strong に，セミコロンがダッシュに変えてあるだけであとは一字一句同じである。念のために，すぐ近くの名詞 will の項を両辞書で比べてみると完全に一字一句違わないことが分かる。更に調べると，二人ともジョンソンの定義をほとんどそっくりそのまま借用していることが分かる。「ほとんど」という意味は，ジョンソンの辞書では，wind は項目１から８までが単語としての定義で，項目９，10はそれぞれ熟語 down the wind, to take or have the wind の説明になっている。ジョンソンの定義のうちもっとも長い項目１を縮小し，あとは２から10までを区分せずに，例文も省いてまとめたということである。その作業をシェリダンがして，それをウォーカーがそっくりそのまま借用したのである。シェリダンがアイルランドなまりであるというこ

とで，ウォーカーの方が評価が高いという印象があるが，シェリダンに対する批判・非難は多分にアイルランド人の民族意識昂揚を意図した文章への反発が原因であると思われる。

ジョンソンの辞書に，リチャードソンの歴史主義，それにシェリダン，ウォーカーの発音解説を加えて，ここに *OED* への布石が完成した。

第6章　近代英語辞書に掲載されたギリシア借用語
—結論に代えて—

1．はじめに

ノルマン・コンクェスト（1066）により支配者の言語となったフランス語から無数の語が借用された。また，ルネッサンス期にギリシア語，ラテン語，フランス語の洗練され，かつ豊富な語彙が英語に取り入れられた。多数借用された難解な外来語を説明するという意図で近代英語辞書が次々に編纂され，出版された。一方，語彙の貧弱な英語に洗練された語彙を多数取り入れるという明確な意図のもとに辞書編纂がなされたことも事実である。初めての英語辞書として有名なコードリの辞書（Robert Cawdrey, *A Table Alphabeticall,* 1604, 以下, *Table*）も難解語辞書とみなされている。しかし，コードリの辞書を仔細に検討してみると，コードリより後のいわゆる難解語辞書とは違う性格をもっていることがわかる。

そこで，本論では，外国語の中でも難解度の高いギリシア借用語を取り上げて，コードリの辞書に掲載されたギリシア語からの借用語が，コードリ以降ジョンソンまでの英語辞書でどのように扱われているかを検討する。同時に英語辞書編纂に対する個々の編者の姿勢を考察し，英語の語彙史と辞書発達史との相関関係を検討する。

2．コードリの辞書に掲載されたギリシア借用語

16世紀半ば過ぎると，ルネッサンスの運動の影響が行き渡り，ラテン語，フ

ランス語はもとより，ギリシア語もそれ程違和感なく英語に導入されるようになってきた。そこで，17世紀初めに出版されたコードリの *Table* にどの程度のギリシア借用語が収録されているのか，収録されているギリシア借用語の特色はなにか，また，コードリに収録されているギリシア借用語がその後の英語辞書ではどのように扱われているのかを検討することにより，近代英語における難解語の特質を考察し，借用語研究の問題点を明らかにする。

Table に収録されているギリシア借用語（g, gr で示されている）の総数は214語で，アルファベット字母順の収録語彙数は以下のようである。

A-32	B-4	C-25	D-13	E-24	G-6
H-13	I-3	L-2	M-23	N-3	O-7
P-33	R-3	S-14	T-8	Z-1	
総計	214語				

これらのギリシア借用語は，17世紀の当時は難解語であった。しかし，今日では日常用語となっている語が多い。I と L の項に収録してある５語全部を例に取ってみる。

Idiome, (g)	a proper forme or speech:
idiot, (g)	vnlearned, a foole
ironie, (g)	a mocking speech
lethargie, (g) (k)	a drowsie and forgetfull disease.
logicall, (g)	belonging to reason

【(k) は a kinf of を示す。idiome は I の項目の最初の語であるから語頭が大文字になっている】

これらの５語は，基本語彙５万６千語を収録し，学習辞書とみなされている LDCE（*The Longman Dictionary of Contemporary English,* 1987）にも収録されて

いることからも分かるように，いずれも我々にとって馴染みのある語である。しかし，当時は，難しいギリシア語という印象を与えたことであろう。今日でも，事態は大差ない。馴染みがあり，日常生活上，必要に応じて使用する単語であるが，英語らしくない難しい外国語であるという印象に変わりはない。

214語のうち，LDCE に収録されている語は194語ある。アルファベットの字母順に語数を挙げる。

A-32	B-3	C-21	D-11	E-21	G-4
H-13	I-3	L-2	M-22	N-1	O-7
P-31	R-3	S-12	T-7	Z-1	
総計	194語				

即ち，*Table* に収録された214語のうち約91％の語が現在も日常的に用いられていることが分かる。しかも，５万６千語収録の LDCE から16万語収録の *Merriam Webster's Collegiate Dictionary*[10]（1993，以下 WCD[10]）にあたってみると，さらに10語が現代英語で用いられていることになり，残存率は約95％まで上がる。コードリに収録されていて LDCE に収録されてないのは《表１》にあげた20語である。

【表１の註】Thomas はトーマスの『ラテン語＝英語辞書（Thomas Thomas, *Dictionarium Linguae Latinae et Anglicanae,* 1587）』，Coote はクートの学習書（E.Coote, *The English School-Master,* 1598）巻末の語彙集，W は WCD[10] の収録状況。

LDCE に掲載されていないとはいえ，これらの20語は，コードリより後の辞書には掲載され，日常語になっている。コードリに掲載されたギリシア語は，そのほとんどが英語の語彙として定着することが約束された語であるといえる。コードリより後の辞書が全く収録しなかったのは decacordon １語にすぎない。

次に，A の項に収録されている語を取り上げて，LDCE と比較してみると，コードリと LDCE の両方に掲載されている語は32語中30語である。WCD[10] に

は32語全部が掲載されている。コードリに掲載してある外国語が，当時既にかなり日常生活に浸透していた語であることを物語っている。

このことから，コードリが，外来語，ひいては英語という言語の実情と将来を見通していた。従って，辞書編纂者として卓抜な識見を持っていたと評価できる。が，しかし事実は，既に英語に定着していたギリシア借用語を収録したにすぎないのである。換言するならば，コードリの辞書は，1冊の独立した辞書としては英語史上初めてであるが，先行する多数の語学の学習書についていた英語の語彙集に収録してある語彙をそのまま踏襲したにすぎない。例えば，クートの *The English School-Master* (1596)。あるいは，先行する様々な外国語＝英語辞書の見出し語および定義をそっくりそのまま借用した。例えば，トーマスのラテン語＝英語辞書（*Dictionarium Linguae Latinae et Anglicanae,* 1587)。クートに掲載のない語をトーマスの辞書で調べてみると，コードリの定義と全く同じであることが分かる。*Table* のＡの項に収録された32語について調べてみると，32語中，クートから見出し語と定義を借用した語が22語ある。《表２》。

残りの10語についてトーマスと照合してみると，定義がほとんど同じであることが分かる。また，クートに収録されてない語は全部トーマスに見出すことができる。

Thomas (1587)	**Cawdrey (1604)**
Analogia,...Conuenience, proportion, likeness.	analogie, (gr) Conuenience, proportion.
Analysis,...Resolution	analysis, (gr) resolution, deviding into parts.
Anarchia, When the people is without a Prince; lacke of gouernment or rule.	anarchie, When the land is without a prince or gouernment.

同じようにして，コードリのＰの項目にある語彙を調べてみる。

《表１》

Thomas	Coote	WCD		Cawdrey (1604)	Bullokar (1616)	Cockaram (1623)	Blount (1656)	Phillips (1658)	Coles (1676)	Kersey (1702)	Bailey (1721)	Bailey (1730)	Johnson (1755)
×	×	△	1	brachygraphie	○	○	○	○	○	×	○	○	○
×	○	○	2	chirograph	×	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	3	chirurgion	×	×	×	×	×	○	○	○	○
○	○	○	4	cosmographie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	×	△	5	decacordon	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	×	○	6	diapason	○	○	○	○	○	×	○	○	○
×	×	×	7	eglogue	○	○	○	○	○	×	○	×	×
○	×	○	8	elench	○	○	○	○	○	×	○	○	○
○	×	○	9	epilepsis	○	○	○	○	○	×	○	○	○
○	×	○	10	evangell	○	○	×	○	○	○	○	○	○
○	×	○	11	geomancie	○	○	○	○	○	×	○	○	○
○	×	○	12	gnomen	×	×	○	○	○	○	○	○	○
×	○	×	13	maranatha	×	○	○	×	○	×	○	○	○
○	×	○	14	neotericke	×	○	○	○	○	×	○	○	○
×	○	×	15	nicholaitan	×	×	○	○	○	×	○	○	○
○	×	○	16	palinodie	○	○	○	○	○	×	○	○	○
×	×	×	17	philacteries	○	○	×	×	○	○	○	×	×
○	○	○	18	sophister	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	×	○	19	stigmaticall	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	20	tetrarch	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（注）△は，WCDで，接頭辞 brachi-，deca- の掲載がある。

《表２》

Coote (1596)	LDCE	WCD		Cawdrey (1604)	Bullokar (1616)	Cockaram (1623)	Blount (1656)	Phillips (1658)	Coles (1676)	Kersey (1702)	Bailey (1721)	Bailey (1730)	Johnson (1755)
○	○	○	1	agonie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	2	allegorie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	3	alpha	○	○	○	○	○	○	×	○	○
○	○	○	4	alphabet	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	5	analogie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	6	analisis	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	7	anarchie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	8	anathema	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	9	anatomie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	10	antichrist	○	○	○	○	○	○	○	○	×
○	○	○	11	antidote	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	12	antipathie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	13	antithesis	○	○	○	○	○	×	×	○	○
○	○	○	14	aphorisme	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	15	apocalips	○	×	○	○	○	○	○	○	○
×	×	○	16	apocrypha	○	○	×	×	○	○	○	○	○
○	○	○	17	apologie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	18	apostacie	○	○	×	○	○	○	○	○	○
×	○	○	19	apostotste	○	○	○	×	○	○	○	○	○
○	○	○	20	apostle	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	×	○	21	apothegme	○	○	○	×	×	×	○	×	○
×	○	○	22	arch	×	×	○	×	○	○	○	○	○
○	○	○	23	archangell	×	×	×	×	○	○	○	○	○
×	○	○	24	aristocraticall	○	○	○	×	○	○	○	○	○
○	○	○	25	arithmeticke	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	×	○	26	astrolabe	○	×	○	○	○	×	○	○	○
○	○	○	27	astrologie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	28	astronomie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	29	atheism	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	30	atheist	○	○	○	×	○	○	○	○	○
○	○	○	31	authenticall	○	×	×	○	○	○	○	○	○
×	○	○	32	axiome	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（注１）arch は Bullokar 以降掲載されなくなるが，難解な外来語というより，英語の日常語彙として認識されるようになったからである。
But many words which had a ‘learned‘ orign pass, in the course of time, into universal usage in the language of every day life; they are no longer felt as grand, important words, but express homely and familiar things or ideas, They ceased to be ‘learned,’ and become popular. (cf. H.C.Wyld, 1906, pp. 126–27)

（注２）Coote に掲載のない語は，Coote（1596）以降に借用された語（例，antipathi，1601），あるいは，Coote に近い年代に借用された語彙（例，apothegme，1587）である。

《表３》

Coote (1596)	LDCE	WCD		Cawdrey (1604)	Bullokar (1616)	Cockaram (1623)	Blount (1656)	Phillips (1658)	Coles (1676)	Kersey (1702)	Bailey (1721)	Bailey (1730)	Johnson (1755)
×	×	○	1	palinodie	○	○	○	○	○	×	○	○	○
○	○	○	2	parable	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	3	paradise	○	○	×	○	○	○	○	○	○
×	○	○	4	paradoxe	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	5	paraleles	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	6	paraphrase	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	7	parasite	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	8	parenthesis	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	9	patheticall	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	10	patriarke	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	11	pentecost	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	12	period	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	13	phantasie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	×	○	14	philacteries	○	○	○	×	○	○	○	○	○
○	○	○	15	philosophie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	16	phisicke	×	○	○	○	○	○	○	○	○
×	×	○	17	phlebotomie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	18	phrase	○	○	×	○	○	○	○	○	○
○	○	○	19	phrensie	×	×	×	×	○	○	○	○	○
○	○	○	20	physiognomie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	21	piramis,-mides	○	○	○	○	○	○	×	○	○
○	○	○	22	planet	○	○	○	×	○	○	○	○	○
×	○	○	23	poem	○	○	×	×	○	○	○	○	○
○	○	○	24	poet	○	○	×	×	×	○	○	○	○
×	○	○	25	pole	○	○	○	×	○	○	○	○	○
×	○	○	26	poligamie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
×	○	○	27	practicall	○	○	×	×	○	○	○	○	○
○	○	○	28	presbitarie	○	○	×	○	○	○	○	○	○
×	○	○	29	probleme	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	30	prognosticate	○	○	○	×	○	○	○	○	○
○	○	○	31	prophecie	×	×	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	32	prophet	○	○	×	×	×	○	○	○	○
○	○	○	33	proselite	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（注１）phrase，poet，poem，等については表２の注１と同じ。

《表３》

コードリのＰの項目にある33語のうち21語がクートにある。また，LDCE には29語（約88％）を収録。WCD[10] には33語全てが収録されており，コードリのＰの項目にある語についても，収録されている語が実は難解語でなく，既に十分に英語に組み込まれていた語であることが分かる。Ｐの項目にある語をクートにある定義と比べてみる。

Coote (1596)		**Cawdrey (1604)**
parable	similitude	parable, (g) similitude,...
paradise	g. place of pleasure	paradise, (g) place of pleasure
paramour	an amourous louer	§paramour, an amourous louer
paraphrase	g. exposition.	paraphrase, (g) exposition of any thing by many words.
patheticall	g. vehement.	patheticall, (g) vehement, full of passions, or mourning affections

コードリの辞書に収録された語彙がギリシア語からの難解な語彙にもかかわらず，現在までも日常的に用いられている理由は，外国語とはいえ当時既に日常的に用いられていた語だからである。その証拠に，当時広く普及していたクートに代表される学習書の語彙集や，トーマスを代表とするラテン語＝英語辞書に繰り返し掲載されている語がほとんどである。そして，表２，３に見られるように，コードリ以降の辞書にも引き続き掲載され続けるのである。コードリが辞書編纂に際して収録しようと意図した語は，当時既に日常的に用いられていた語である。そのことはコードリの辞書のタイトルページを見れば分かる。

A Table Alphabeticall, conteyning and teaching the true vvriting, and vnderstanding of hard vsuall English wordes, borrowed from the Hebrew, Greeke, Latine,

or French. &c.

With the interpretation thereof by *plaine English words, gathered for the benefit & helpe of Ladies, Gentlewomen or any other vnskilfull persons...*

（Cawdrey, 1604, タイトル頁から3頁目）

この文句の中で，「日常生活に使われる難解な英語（hard vsuall English wordes）」，つまり，「難解ではあるが英語になっている語」という表現には注意を要する。コードリの意図は，あくまでも日常生活に用いられ（vsuall），英語に組み入れられている単語（English wordes）を収録し，外国語を全く知らない人たち（vnskilfull persons），上流階級といえども教育を受けられなかった婦人達の便宜（*for the benefit & helpe of Ladies*）を考えていたのである。コードリのタイトルページにあるこれらの文句は文字通りに受け取るべきであり，その意図と努力の成果は辞書本体に十分反映されていると評価することができる。また，コードリの「序文」も，彼の意図を反映して極めて易しい文章で書かれている。

By this Table (right Honourable & Worshipfull) Strangers that blame our tongue of difficultie, and vncertaintie may heereby plainly see, & better vnderstand those things, which they haue thought hard ....

（Cawdrey, 1604, タイトル頁から3頁目）

コードリ以降の難解語辞書は，コードリの意図とは逆に，競って難しい外来語を数多く収録するようになり，辞書は肥大化の一途を辿り，一般の人々には縁遠くなっていった。掲載された語も，難解語が多くなっていった。「序文」も辞書の内容に比例して難解になっている。例えば，コケラム（H.Cockeram, 1626）の辞書のタイトル頁からは，usual という文字が消え（*The English Dictionarie or An Interpreter of Hard English Words*），「序文」も難解になっている。

Part of every desertful birth, (*Right Honourable*) *in any man his Country may challenge, his Soueraigne a part, his Parents a part, and his freinds another. As I cannot be usefull in euery respect to each of those, so I will striue to expresse at least a will, if not a perfection in ability to all.*

(H.Cockeram, 1626, 序文)

コケラムとは違って，コードリが収録した語彙は，ほとんどがその後の辞書にも漏らさず収録され続けて，現在でも日常生活の重要な部分を占めている。

参考文献

Bailey, N. (1721, rpt. 1969), *An Universal Etymological English Dictionary,* Hildesheim: Olms.

Baily, N. (1730, rpt. 1969), *Dictionarium Britannicum,* Hildesheim: Olms.

Bailey, R. (ed.) (1987), *Dictionaries of English: Prospects for the Record of our Language,* Univ. of Michigan Press: Ann Arbor.

Bé joint, H. (1994), *Tradition and Innovation in Modern English Dictionaries,* Clarendon Press: Oxford.

Benson, M. et al (1986), *Lexicographic Description of English,* John Benjamins, Amsterdam.

Berg, D. L. (1993), *A Guide to the Oxford English Dictionary,* Oxford U.P.: Oxford.

Blake, N. F, ed. (1973), *Caxton's Own Prose,* Andre Deutshe.

Blount, J. (1656, rpt. 1972), *Glossographia,* Hildesheim,: Olms.

Boswell, J. (1791, 1953), *Life of Johnson,* Oxford U.P.: Oxford.

Bullokar, J. (1616, rpt. 1971), *An English Expositor,* Hildesheim: Olms.

Burchifield, R. (ed.) (1987), *Studeis in Lexicography,* Clarendon Press: Oxford.

Cawdrey, R. (1604, rpt. 1976), *A Table Alphabeticall of Hard Usual English Words,* Scholar: New York.

Caxton, W. (1487), *Book of Good Manners,* (N.F. Blake, ed. *Caxton's Own Prose,* Andre Deutshe, 1973)

Caxton, W. (1490), *Eneydos,* (N.F. Blake, ed. *Caxton's Own Prose,* Andre Deutshe, 1973)

Cockeram, H. (1623, rpt. 1970), *The English Dictionarie,* Olms: Hildesheim.

Coles, E. (1676, rpt. 1973), *An English Dictionary,* Olms: Hildesheim.

Collison, R. L. (1982), *A History of Foreign-Language Dictionaries,* Andre Deutshe: London.

Coote, E. (1596, 1971), *The English School-maister,* 南雲堂.

Dyche, T. & Pardon, W (1735, rpt. 1972), *A New General English Dictionary,* Olms: Hildesheim.

Fowler, H.W. and F. G. (1911[1], 1929[2], 1934[3], 1951[4], 1964[5], 1976[6], 1982[7], 1990[8], ed. E. Allen), *The Consise Oxford Dictionary of Current English,* Oxford: Clarendon Press.

Guralnik, D.B. (1970, 1982[2]), *Webster's New World Dictionry of the American Language,* Simon and Schuster: New York.

Hartmann, R.R.K. (ed.) (1983), *Lexicography: Principles and Practice,* Academic Press: London.
（ハートマン. 1984,『辞書学』三省堂）

林哲郎 (1968)『英語辞書発達史』開文社

Hayashi, T. (1978), *The Theory of English Lexicography 1530～1791,* John Benjamins: Amsterdam.

Hornby, A.S. et al. (1942), *Idiomatic and Syntactic English Dictionary,* 開拓社

Hornby, A.S. (1948, 1980[3]) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English,* Oxford Univ. Press: 開拓社 (*ALD*)

Hulbert, J.R. (1955), *Dictionaries British and American,* Andre Deutshe: London.

岩崎研究会 (1981～),『英語辞書の比較と分析』第1集～第4集, 研究社

Johnson, S. (1755, rpt. 1968), *A Dictionary of the English Language,* Olms: Hildesheim.

Johnson, S. (1755, rpt. 1990), *A Dictionary of the English Language,* London: Longman.

加島祥造 (1976),『英語辞書の話』講談社

Kersey, J. (1702, rpt. 1974), *A New English Dictionary,* Olms: Hildesheim.

小島義郎 (1984)『英語辞書学入門』三省堂

(1999)『英語辞書の変遷—英・米・日本を併せ見て』研究社

Kurath, H. et al. (1952～), *Middle English Dictionary,* Univ. of Michigan: Michigan.

Landau, S.I. (1984), *Dictionaries The Art & Craft of Lexicography,* Charles Scribner's Sons: New York.

三輪伸春 (1988),『英語史への試み』こびあん書房

(1995),『英語の語彙史—借用語を中心に—』南雲堂

Mossé, F. (1947), *Esqisse d'une hisotire de la langue anglaise.* I.A.C.: Lyon.
（F.A. モセ (1963)『英語史概説』開文社, 郡司利男・岡田尚訳）

Murray, J.A.H. et al. (1884～1928, 1982[2]), *The Oxford English Dictionary,* Oxford.

竹林滋他編, (1927[1], 1936[2], 1953[3], 1960[4], 1980[5], 2002[6])『新英和大辞典』研究社

永嶋大典 (1983)『ジョンソンの「英語辞典」』大修館

(1983)『OED を読む』大修館

(1974)『英米の辞書—歴史と現状—』研究社

Nagashima, D. (1988), *Johnson the Philologist,* Kansai Univ. of Foreign Affairs.

Onions, C.T. (1966), *The Oxford Dictionary of English Etymology,* Clarendon Press: Oxford.

Partridge, E. (1958[1], 1966[4]), *Origins: An Etymological Dictionary of Modern English,* Routledge: London.

Phillips, E. (1658, rpt. 1969), *The New World of English Words,* Olms: Hildesheim.

Puttenham, G. (1589, 1970), *The Arte of English Poesie,* Kent State Univ. Press.
Richardson, C. (1836, 1844), *A New Dictionary of The English Language,* London: W. Pickering
ロリンズ (1983)『ウェブスター—辞書の思想』瀧田・本間訳，東海大学
Scheler, M. (1977), *Der englische Wertschatz,* E. Schmidt: Berlin.
（シェーラー，1986,『英語語彙の歴史と構造』大泉昭夫訳，南雲堂）
Scheler, M. (1982), *Shakespeares Englische,* E. Schmidt: Berlin.
（シェーラー，1990,『シェイクスピアの英語』岩崎春雄・宮下啓三訳，英潮社）
Sheridan, T. (1780, 1784), *A General Dictionary of the English Language,* Dublin: P. Wogan.
Skeat,W.W. (1879～82, rep. 1909), *An Etymological Dictionary of the English Language,* Clarendon ress: Oxford.
Starnes, De W.T. & G.E. Noyes (1946, rpt. 1991), *The English Dictionary from Cawdrey to Johnson 1604～1755,* John Benjamins: Amsterdam.
Starnes, De W.T.(1954), *Renaisannce Dictionaries English-Latin and Latin-English,* Univ. of Texas: Texas.
Thomas, T, (1587, rpt. マイクロフィッシュ版), *Dictionarium Linguae et Anglicanae,* Scholar: New York.
Walker, J. (1755, 1853), *A Critical Pronouncing Dictionary,* Thomas Kelly: London.
Weibrat, H.D. (ed.) (1972), *A New Aspect of Lexicography,* Southern Illinois U.P.: London.
Wells, R.A. (1973), *Dictionaries and the Authoritarian Tradition,* Mouton, The Hague.
Wyld, H.C. (1906. rpt. 1962), *The Historical Study of the Mother Tongue,* Senjo: Tokyo.